

テレビドラマを楽しむ

2024-4-6 野口幹夫

録画したテレビドラマを、妻とともに見る朝のひと時は、かけがえの無い楽しみになっている。いくつか例をあげると「VIVAVT」「となりのナースエイド」「舟を編む」「厨房のアリス」「夢千代日記」など、むろん1年を通じての大河ドラマや、長編の韓国ドラマもある。

この原稿を書くにあたって考えた。この時間は無駄だろうか。答えは無駄ではないだ。

やはりそれはテレビドラマが面白いからだ。その面白さは多岐だ。

例えば「厨房のアリス」は、自閉症の女性とは このようなものかとしえてくれた門脇麦の演技の存在感だ。



「舟を編む」は何気なく使ってきた辞書というものが、こんな苦労の中で生まれてきたとこの驚き。「VIVANT」は架空のアジアの砂漠国の資源をめぐるロマンを想像する楽しみ、「夢千代日記」はリバイバル作品だが、さすが吉永小百合の主演作で、今の作品よりゆったりと格調高い作品だ。最近始まった「季節のない街」は、山本周五郎作なので時代劇かと思いきや、災害後の避難小屋を舞台とした現代劇で、脚本を朝ドラ「あまちゃん」を

手掛けた宮藤官九郎がやっていて、それと同じように列車のテンポに乗る調子のいいドラマで これからの 10 回が楽しみだ。

考えてみれば、この楽しみは、昔はそれを小説を読むことで得てきたことだ。

その両者を比較すると、小説の興味は作家に向かっていた。漱石、藤沢周平、大江健三郎、村上春樹 トルストイなど、それぞれ作家の人となりに興味の中心があった。

テレビドラマではまず作家には関心がない。ストーリーそのものと、それを演じる俳優さんとリアルな背景に興味の焦点がある。

そのような違いはあるにせよ、自分の世界を想わぬ広さに広げてくれるという点では人生にとっての意義は同じだ。そうなればテレビドラマの方がエンジョイするのが楽だ。小説を長く読み続けると目がしょぼくなる。それもあってこのところ小説は縁遠くなったが、それでも毎年芥川賞作品だけは読むが、面倒な割に感心しないものばかりだ。

むしろ自分の一日の時間で、テレビより本を読む時間の方がずっと長いが、それは楽しみのためではなく、習得のためとか 調査探求の目的があつてのものだ。

必ず見るテレビ番組もドラマ以外は「ヒューマニエンス」や、「フロンティア」「ニュース」などがあるが、これらはこの知見習得の目的で見るたぐいだ。

我が人生に欠かせなくなった楽しみの一つテレビドラマ、これからも新しいドラマが始まると録画 しかも連ドラの指名予約をしていこう。